

宗門文化の流れ

三 浦 成 雄

目 次

一、公家接近にみる文化的性格……………	一三
二、武家接触にみる文化的性格……………	一七
三、大衆との関係にみる文化的性格……………	二三
四、結 び……………	二五

一般的に、宗門文化の形成とその発展は、一宗門の宗勢と、その伸張、発展拡大に関して、極めて大きな関係をもつものである。

現在、多くの日本文化を有する中で、この文化の底辺に存在するものは、宗門文化に外ならない。

この、生れた文化は、それ自体、独自の発展を続け、次第に質的な変化をみせて存在しているものが多くある。

ここで述べようとする法華宗に存在する宗門文化は、それが所謂、正法弘通による、布教に基いた所の文化であり、布教から飛躍した文化として存在していない、この点が、文化を眺めるうえでの大きな特徴ではないかと考えら

宗門文化の流れ

れる。

しかもこの文化の波長は、宗門盛衰の波長と平行し、それぞれ、時代に即応した形態をとって現われているのである。

一、公家接近にみる文化的性格

宗門の弘通感化の対象は、その多くを庶民階層に及ぼした部分が非常に多いが、朝廷との接近によつて発展した部分もかなり存在している。

法華宗の京都弘宣流布の基礎は、日像上人によつて形造られた。

永仁二年（一二九四）、上京した日像上人は、三黜三赦の苦難を経て、元弘三年（一一三三）三月五日、妙頭寺に後醍醐天皇よりの綸旨を受けられた。

妙頭寺 御立願所

右当寺者、靈験無雙之本尊、利生方便之聖跡也、故天下一統聖運、洛陽九重還幸、於此道、凝祈念、被發誓願畢、然則衆徒等各成合之思、可抽懇祈也、誠令御満足者、專令尊敬當時佛法、可被教寺領興行之旨、大塔宮二品親王令旨如何、悉之以狀

元弘三年三月五日 中 院

左 少 将 判 形

又、建武四年四月四日、院宣がくだり、これらが機縁となつて、朝廷を中心にした弘通の成果があげられたのであ

る。

さらに、妙頭寺第二祖大覚大僧正は、古来、近衛経忠の子であると云われているが、もしそうでないにしても、近衛家との関係は何等かの形で存在していたと思われる、朝廷との接近にも注目すべき所がある。

延文二年（一三五七）には後光厳天皇より繪旨をうけられ、

三千万部法華經如説読誦之事、勸進都鄙一、弘一乗円頓宗旨一、被抽四海静謐之懇祈一佛、神妙由、被天下之状

如件

（書入）

「延文二」

八月二十五日

（洞院大納言）
実 夏

妙頭寺僧正御房

このように、妙頭寺に於ける日像、大覚、その他日霄上人が、朝廷との接触によつて、法華弘通を軌道にのせ、宗門文化の基礎を築いていった。

宗史は妙頭寺より日隆聖人中心の時代に移向するが、聖人在世中に於ける文化的底辺は、庶民的性格を持ち、大衆教化のスローガンのもとにその方向が転化されたため、公家との接触は比較的少い。しかしこの中にあつて、極めて密な関係を生み出していると思われることは、永享五年（一四三四）如意王丸が京都六角大宮に本応寺再建のため広大な敷地を寄進し、塔頭三十数坊、七堂伽藍を建立したことにみえるが、さらに聖人の直弟金剛院日与上人（一四二六〜一四九一）にその関係をみる事ができる。

宝徳元年（一四四九）、日隆聖人西国弘通の旅路、兵庫久遠寺改宗帰伏の法筵に接したもと時宗の僧日与上人は、

宗門文化の流れ

宗門文化の流れ

学芸にその才を發揮し、当時の歌客、心敬、宗祇、秀句等とも親交があつた。寛正元年（一四六〇）、一条関白兼良の求めに応じ、殿中に法華經要品を講讚、又延徳二年（一四九〇）には「法華和語記」四巻を謹述し、後土御門天皇の乙夜の覽に奉られた。文正四年（一四六六）には、日明、日与両上人の勸進により、本能寺大書院に於て、大連歌の宴が催され、その句集は「落葉集」として残されている。なお宗祇によつて編纂された「新撰菟玖波集」の中には日与上人作の連歌十一首が収められてあり、その他の布教的功績と共に、宗門文化に帰与されたことを知ることができるのである。又、伏見宮家との關係に於ても、伏見宮榮仁親王と姻戚關係をもつ妙蓮寺日応上人が、長録三年（一四五九）妙蓮寺正統嗣法となり、上人の祖父経有の妹資子は崇光天皇の宮女として伏見宮榮仁親王の御母にあたり、上人の父の妹は後崇光院に仕え、後花園天皇及び伏見宮貞常親王の叔母であり、准三宮となつて敷政門院と号した。さらに上人の妹は貞常親王の室となり、邦高親王の叔母であり、上人の兄長賢の女朝子は、後土御門天皇の宮女として、後柏原天皇の叔母であることから、公家接触に好機會を得たことがわかり、前の「新撰菟玖波集」にも上人の名がみえ、特にその關係を知ることができる。

妙蓮寺九世日忠上人（一四三八～一五〇三）も、花園天皇の宣示によつて禁裡に於て当家台家の違目を講じた、とあり又、法華宗の薩南三島の布教にあたり、屋久、永良部の両島を教化した日増上人（一五七二～）も、明応四年（一四九五）、一条関白教房に法華經要品を講じた、とある。

このようにして宗務の興隆はその一途をたどり、公家への接触は益々密となつていったが、これが山徒（叡山）の反感をますます高める結果となつた。

このため文明元年（一四六九）、山徒は法華宗徒を京都から追放しようとして迫り、文明二年十二月には興福寺が法華

宗徒の奈良在住者に対して攻撃を加えた。そうした中で明応五年（一四九六）には内府（二条尚基）が法華宗に帰依した、と伝えられ、本能寺の招請によつて訪問したことなどあり、文亀三年（一五〇三）正月には、法華宗僧の上人号申請を却下するに及んだ。そして大永七年（一五二七）には山徒が坂本の法華宗徒を追放し、舎宅を破却、管領細川高国に対して法華宗の僧正停止を要求した。

これら法華宗の伸張に対する反抗が、天文五年（一五三六）に起つた所謂天文法乱である。この事件は、法華宗にとつて勿論大きな衝撃を受けたが、この復興に際して日承上人の功績は極めて大きなものがある。

伏見宮邦高親王の子として、本能寺に出家得度した上人は、法乱の後も本能寺から難をさけた日侶上人と共に堺にあつて帰洛の運動を続けた。

天文十四年（一五四五）七月六日、足利家役人増田氏より状を受け、日蓮門下中最も早くその復興に着手することができたのであつた。

「本能寺家衆御還往之由筑州殿申達候処、近日可上洛」云云
同年八月、公方より奉書来着し

「本能寺可有本屋敷還住之候奉書之上旧蹟六角南四条房門北櫛笥東大宮西四丁花所之事如先々可有知行」云云
こうして八月中旬、六角と四条房門との間、油小路と西洞院四丁花所の地を買収し堂宇の建立を始めた。

復興成つて落付きをみせた京都に於て、続いて勝劣一致の論争が起り、日承上人はこの間心勞し、永録七年春、和陸の条目を定め、八月二十日諸本山の調印を了えた。これが「永録の盟約」と呼ばれるものである。

一、以_レ法華經二部八卷二十八品肝心上行所伝南無妙法蓮華經一味同心可_レ奉_レ祈_レ広宣流布_二之事。

宗門文化の流れ

二、法理既一統之上者自讚毀他私曲謗言互可令停止之事。

三、諸門和談之間、本末衆徒檀那互不可誘取之事。

この盟約は、本質的にみて法華宗教学によつて統一されたものではなく、それ以後の宗勢にかなりの影響を及ぼしたが、山徒の攻撃に対する所謂、矛盾の統一、としその意義を見出さなくてはならない。

当時、本興寺に於ては、日諦上人（興山六世）が在り、度々上洛して、禁裡に於て法華經の講釈を重ね、これによつて弘治三年（一五五三）三月二十五日、後奈良天皇より碩学多才の綸旨を受け、本興寺に勅願所の宣示を下され、日隆聖人に上人号の宣示を賜つたのである。

宣示

当寺令專興隆之沙汰碩学多才佳名神名也、弥々挑法燈宣被抽宝祚延長国都無為之懇所之由天氣所也乃而如件

弘治三年二月二十五日

在 中弁 在判

日諦上人御房

宣示当寺事、可号勅願所之由被聞召畢

然者弥々令專法流相承可奉抽天下安全宝祚長久懇所之由天氣所也 乃而執達如件

弘治三年二月二十五日

左 中弁 在判

宣示

故権大僧都日隆 宣贈上人号

各令存知其旨弥々可令専法流相承天氣所也

委以状

弘治三年二月二十五日

当寺衆僧中

このように、能興両山を中心に公家との接触は多く、江戸時代に於ても有栖川宮家との交流など多くみることができらる。

明治維新による王制復古の思想は、廃佛棄釈運動へと展開し、明治四年（一八七一）、政府は勅願所、及び勅修の法令を廃止したため、この期間、法華宗による公家への接触は一時断たれていた。しかしその後本興寺六十世日雄上人が、伏見宮家にその再交付を申入れ、再び関係を維持されるに至つたのである。

以上のことがらからみて、公家との文化的接触は、宗勢の上からみても、かなり大きな範疇をしめていたことがわかるのである。

二、 武家接触到みる文化的性格

武家との関係は、大覚大僧正の時代に至り、急速に親密さを加えていった。

貞和三年（一一三四七）九月十五日、足利直義は御教書を下し、南方兜徒退治のため観音経を転写せしめ、同六年に

宗門文化の流れ

宗門文化の流れ

は義詮が天下静謐祈禱のため観音経五千巻を転写せしめるなど、特に観応、文和、延文年間に亘り、幕府のために祈禱を修するなど、かなりの発展をみた。

又妙顕寺四世日齊上人も、応永二年（一三九五）、義満より御教書を以て祈禱を命ぜられ、同六年には宜しく四海の安全を禱爾し奉るべし、との綸旨をくだされた。

日隆聖人は、応永二十七年（一四二〇）、妙顕寺月明の追手をのがれた尼崎の地に在ったが、管領細川右京大夫満元内室の懷妊に伴う変成男子の祈禱を修して外護を受け、本興寺を創建した。特に庶民の性格の強い聖人にあつては、本興寺創建が数少い武家との接触である。この外、永享十一年（一四三九）、南河内加納に於て、聖人の母系、斯波家の一族、斯波義盛と再会し、法華寺を創した。本興寺に於ては天文十七年に大客殿を完成し、法橋高平春卜、狩野紹与の筆によつて成る書院には当時の文化を見ることができ、その先文明元年（一四六九）、五世日与上人によつて創立された開山堂は唐様建築として香り高い存在である。

さて、歴史が信長の時代に移ると、佛教全般に亘つて迫害が強化され、特に法華宗関係への圧力はひどいものがあつた。天正十年（一五八二）本能寺の堂宇は信長と共に灰に歸した。而して天正七年の安土宗論と共に、文化的性格も底滞を招いた。

信長が寺院を宿舍とすることについては、天正七年（一五七三）のプロイス書翰にみえるように、鯉江城を攻撃する際、近江の百濟寺を宿としたことが記録にあるが、信長の本能寺定宿について云えることは、当時の佛教全般の墮落の中にあつて、本能寺が佛教徒としての正統な歩みを維持していたこと、又直接寺院に宿し、彼の武威を誇示し、強い圧力を示そうとしたこと、それに日典上人を始めとする日良、日増上人によつて布教の成果を得た薩南三島は、

最新の武器庫としてその背景が本能寺にあつたこと、等の見方ができると思う。

秀吉の代に至り、社会秩序の恢復、綱紀の肅正が計られ、佛教は擁護され、本能寺は天正十三年（一五七九）に還住の許可がくだされ、安土宗論の際に提出した起請文も返還され、宗門は大きな躍動をはじめたのである。

両山には多くの書翰や御朱印が存在し、慶長三年（一五九八）日蓮上人の本興寺三光堂の建立にあたっては、秀吉、加藤清正の金封寄進などあり、これらをみてもその繁栄がうかがい知れるのである。今ここに、本興寺に現存する禁制二十八通と寄附状、折紙等を挙げると、

三好宗三

天文十八年三月 日

右京大夫晴元

天文十八年四月二日

近藤山城守貞治

天文十八年四月二日

伯耆守

天文十八年四月二日

伊丹大和守親興

天文十八年卯月六日

筑前守

弘治二年三月 日

長俊貴布彌屋敷
寄附状

弘治二年三月三日

番所司宗玖宗幸宗重
長清長秀五人在判

弘治二年四月三日

散位政生

弘治二年八月 日

豊前守

永録元年六月 日

安宅撰津守冬康

永録元年七月朔日

宗門文化の流れ

宗門文化の流れ

右京大夫右衛門尉

永録五年三月二十三日

快秀（在判）

永録五年三月二十三日

掃部頭

永録六年五月七日

在判

永録六年五月七日

備前守

永録六年五月十三日

勝正

永録八年十月十五日

織田彈正忠

永録十一年九月 日

右兵衛尉

永録十一年十月五日

伊丹兵庫頭

元龜元年七月十二日

在判

元龜元年十月十日

彈正忠
孫四郎（連著）

元龜元年十月十日

（織田信長）代官

（天正年間頃）

二月十六日

織田信長七人衆連著

（天正年間頃）

二月十六日

左久間右衛門信成

阪井右近尉正尚

森三左衛門可成 野間大橋兵衛長村

蜂屋兵庫助頼隆 柴田修理亮勝家

竹内下総守秀勝

信濃守 (年号無記) 三月吉日

政生(折紙) (年号無記) 六月二十日

木下藤吉郎(折紙) (年号無記) 霜月十五日

秀吉(折紙) (年号無記) 五月一日

秀吉(折紙) (年号無記) 六月二日

秀吉(折紙) (年号無記) 八月二十九日

秀吉(折紙) (年号無記) 五月三日

秀吉(折紙) (年号無記) 六月二十七日

齊藤三郎史エ門長盛 (年号無記) 三月朔日

美濃守國親 (年号無記) 三月朔日

和久與助房政、鹿塩蔵 (年号無記) 三月朔日

綱守高太郎守可久 (慶長十五年)

加藤清正 (慶長十五年)

戸田左門 元和五年十一月朔日

この中には、天文年間、細川晴元と同氏綱との対立により、摂津に於て三好長慶と同宗三との粉争にまで発展し、晴元は手勢を卒いて摂津に下向し、西宮付近まで進出、この時従軍した諸将の禁札があり、この時伊丹城主親興は宗門文化の流れ

宗門文化の流れ

三に味方して破れ、天文十九年三月、長慶と本興寺に於て和睦の対面を行つてゐる。

天文法乱以来、数々の痛手をうけた宗門が、秀吉の保護政策のもとに安定した発展をとげ、その後次第に充実さをあらわしてきたのは、やつと江戸時代に入つてからではないだろうか。

寛文五年（一六六五）には幕府より御朱印を賜り、宗門史上に於ても実力を備えていたことがわかる。江戸時代の宗教政策は、強力な本末関係を形造り、所謂中央集権化をはかり、このため本山の勢力を強め、末寺の勢力を中央に吸収し、この結果からみて、宗門の安定した動きの半面、室町時代を中心に展開したダイナミックなものとは対称的な存在が感じられるのである。

三、大衆との関係にみる文化的性格

先に述べた通り、宗門文化の流れに於て、大衆との関係にみる文化的性格は、極めて大きな特色となつてあらわれていることは注目できるところである。

妙頭寺二祖大覚大僧正の、公家、武家接近による功績は前に述べたが、大僧正には同時に、西国弘通による布教がある。伊丹に妙宣寺、牛窓に本蓮寺、淡路に妙京寺その他が建立され、この寺院を中心にした庶民的な地域文化が形成された。

日隆聖人の場合は、その時代にあつて、殊に権力を離れ、姿勢はひたすら大衆に弘通の目をむけ、そこから起きてくる多くの文化的性格も、自づから米屋次郎五郎、山本宗句等といった庶民の名前が数多く浮かびあがつてくるのである。正法弘通のための強烈な折伏と、靈験によつて起る奇瑞、そこから民衆の帰依を得ていつた。これが聖人の大

きな特徴だと云わねばなるまい。

応永二十五年（一四一八）、河内三井村に於て、天台宗五台山本法寺の円澄法印を折伏、本嚴寺と改めた際、その縁となつたのは一庶民馬場隆光であり、応永二十七年尼崎に本興寺を建立した際も、辰巳の浜に住む米屋次郎五郎が縁となつている。又応永三十三年、色の浜の禪寺金泉庵を本隆寺と称したのは、病氣平愈に對する村民の帰依であり、これを見ていた敦賀の人紺屋五郎右衛門は、聖人に同年、真言宗大正寺円海法印に對決する機会をあたえ、本勝寺として改宗したのである。

京都本能寺發展の基礎は、はじめ本応寺創建の菓子商山本宗句によつて形成されたものである。そして永享十一年（一四三九）、西国弘通の途に上り、兵庫三川口の旅籠屋が縁となり宝徳元年（一四四九）、久遠寺を改宗、続いて病氣平愈の祈願によつて民衆の帰依をうけて備中に本隆寺を、これに感激した讃岐の住人が宇多津に聖人を招き、これもまた病即消滅の経力によつて本妙寺が創建されるなど、すべて庶民との接解による弘通の拡大であつた。

この外、本興寺、河内加納、富山誕生寺にみえる靈水の奇瑞は、大衆生活の上にも大きな功績を残したものである。

聖人の晩年、宝徳三年（一四五二）頃に開かれた勸学院の経営も、きわめて庶民的な香りが高く、権力に追従しない地域文化として、特筆すべきものがあり、全国の学僧を集めて、宗門史上に大きな文化を築きあげ、文化部門に於ても中心的存在であつた。

聖人のこれら庶民的な文化形態は、室町中期の頃にその全盛をみたが、このことは天文法乱の際、武装して参集した幾万の信者数をみても明白なことであらう。

宗門文化の流れ

檀林も、慶安五年（一六五二）、京都伏見に大亀谷檀林、寛文年間には細草檀林が創設され、尼崎勸学院と並んで軌道にのつた発展をみたのである。

江戸時代に於ては、法華宗の弘通のための、所謂折伏環境は、士農工商階級の存在のもとに、極めて複雑な性格を形成し、又キリスト教徒弾圧政策等に見られるとおり、宗門自体としても飛躍的な動きは失われていき、藩中心の行政組織によつて、弘通自体においても孤立的傾向を帯びてきたのである。

このような状況の中で、宗勢上の危機は、天明の大火による本能寺の焼失と、文政五年の本興寺焼失によつて、苦難の一時期を過すことになつたが、これと平行して全国に抬頭してきたのが、八品講運動と呼ばれるものであり、これが次第に、在家布教による文化を形造つていつたのである。

舜龍院日蒼上人の江戸八品講、事妙院日然上人の浪華八品講、松平左近公の高松八品講、長松清風師の華落八品講等がそれであり、こうした運動が、江戸末期、殊に文化・文政年間を中心に、大きな折伏運動を展開したのである。

日蒼上人は文政四、五年に八品講を結成、左近公は嘉永年間に、日然上人は文政三年、清風師は安政四年にそれぞれ結成し、関東一円と、関西及四国を中心にした西日本一帯にこれらの運動が展開され、そして在家みづからが、布教の第一線に立ちあがつたのである。

これら在家布教の運動が芽ばえたその原因には、宗門が幕府の保護をうけて、形式的な伝統にのみ執著した事があげられるが、むしろ主要な点は、庶民階級の勃興と、大衆の持つ宗学研究への意識の高揚が存在し、それに伴う大衆の自覚が高まつていつたことにあると考えられるし、この行為は宗門史の上からみても極めて革命的な性格を持つものであつたと考えられる。

又これら八品講指導者の持つ共通の性格は、単に八品講運動の指導者として存在するのではなく、宗団の中の個、檀家の中の個としてではなく、個々の信仰人を作り出したのであり、同時に、社会、経済、文化のあらゆる面にわたって、地域社会の上での大きな指導的役割りを演じているのである。

四、結 び

長い伝統の中で、幾つかの起伏を経過しながら流れる宗門文化の性格は、以上述べた三つの大きな流れを作り、しかもそれが、それぞれ個別的に存在するものとしてではなく、互いに相交さくしながら存在し、殊に大衆への貢献にみえる宗門文化は、文化全般を通してその主動的な地位をしめていることがわかるのである。

大衆との接触は、文化的性格の流れの中で、はつきりとした上昇曲線を描き出し、下剋上の時代においても、安穩な社会形態の中に於ても、何ら変化なく、着々とその歩みを続けたのである。

日隆聖人在世中を頂点に、その後次第に宗門の孤立状態に陥つた宗勢と文化の中に、後に起つた八品講運動の必然的性格が存在していることを見逃すことはできない。

芸術部門に於ては、宗門文化の中にしめている範囲は少く、堺顕本寺立達上人の歌沢、本能寺塔頭大乘院日甫上人の本能寺未生流の名があげられるが、あくまでも弘通の歴史を通してしか眺めることのできない宗門文化は、それ自体大きな特色をあらわしていると云わなければならない。

参考資料

日本佛教史

宗門文化の流れ

宗門文化の流れ

日本文化と佛教

日蓮教団全史(上)

日蓮教団史概説

尼崎志(一)

撰津伊丹氏考

桂林学叢(一〜四)